

## オリンピア半島 釣り紀行（2）

### ——救いのクルーザー——

夕闇も次第に濃くなる。入江の真ん中で、わたしたちの小さなボートはゆっくりと西に流されていく。かなわぬまでもわたしは一本の櫂を漕ぐが、潮の流れは思いのほか早く、岸は一向に近くならない。スクウィーキー、スクウィーキー……。かもめが盛んに鳴く。

「さて、どうしたものか？」内心困り果てたものの、息子が心配するといけないので、何気ないそぶりをしている。「危機管理の要諦は、あらゆる情報を収集し、危機の構造を把握し、対策を実行すること。」リスクマネジメントのポイントが頭に浮かぶが、肝心の効果的な対策が見つからない。

だが、スミティは悠然とエンジンと取り組んでいる。「スミティは昔軍隊に行っていたといっていたが、海軍だったかな？そうなら何とかなるだろう。」わたしもスミティの落ち着いた様子に少しホッとする。

そうこうするうち、東の方から微かにエンジン音が聞こえてきた。音はぐんぐん近くなり、小さなクルーザーが入江の角を回って現れた。陽に焼けた白髪の男が声をかけてきた。

オーイ、だいじょうぶか？

この時ばかりは本当に安堵した。

夕暮れ時、ボートが潮に流されているのをみて、不審に思っただろう。

エンジンが止まっちゃってね。さっきから動かそうとしているんだが駄目なんだ。

あんたはこの辺りじゃ見たことのない顔だが近くの人かい？

スミティが問いかける。

最近この近くに引っ越してきたんだが、あんたは隣のスミスさんかい？

隣の家は牧場だが、何百メートルも離れて雑木林で遮られているのでお互いの行き来もないらしい。

そうだ。俺のことはスミティと呼んでくれ。一緒に乗っているのは日本から来た友達の親子さ。

ワイフと一緒に夕方のクルージングを楽しんでいたんだが、ちょうどよかった。岸までひっぱってあげようか。

それは助かる……。

のんびりした会話が交わされた後、わたしたちはクルーザーに引っ張ってもらい、岸に向かった。裏庭では何も知らない妻がけげんそうにクルーザーを見ながら、わたしに向かって「何か釣れたあ？」と大声で叫ぶ。

それどころじゃなかったんだが、まあ無事帰れてメデタシ、メデタシ。

### ——釣り三昧の日々——

翌朝6時半。息子とわたしは起き抜けにまずブルヘッド釣りにトライ。昨日とはうってかわって曇空のうすら寒い日で風が強い。入江に無数のさざ波がたち、かもめの鳴き声が喧しい。ギリモット（Guillemot 海ガラス）が数羽飛んでいく。グreekの「ピアノ協奏曲」を思い起こさせる冷涼なフィヨルドの世界である。気温は12～13度。30分ほどで数匹を釣り、まずまずの釣果。

やがて皆も起きてきたのでわたしたちは庭で朝食のためのブロッコリーやトマトなどを採取。

普段は家でも手伝いなどしないヨーコが、珍しく玉子焼きにトライし6人分を準備すると、ヨシ坊はいそいそとホットミルクを配って歩く。

朝食は自家製のブルベリーのジャムと玉子焼き、ミルクとコーヒー、それに盛りだくさんの野菜サラダとハム。

全員が揃ったところで朝のお祈りである。スミティとベティはクリスチャン・サイエンス派の敬虔な信者である。スミティがヨーコに「ここを読んでごらん」と聖書を渡し、ヨーコは古語の英語を四苦八苦して読んだ後、朝食が始まる。

子供たちはもちろん英語が分からないが、身ぶり手振りで何となく話は通じるらしい。「こんな大きなサーモンが釣れるんだよ。」とスミティがいうと、ヨシ坊は目を輝かして聞いている。

朝食の後、ボートのエンジンを修理し、わたしたちは満潮近く再び入江に漕ぎだした。空は抜けるようなコバルトブルーから群青色へと変化する。風は止み、陽の光が鏡のような水面にキラキラと反射する。この日は当たりが今一つ。ボートで入江を幾度となく回遊するがヨシ坊とわたしが15センチ足らずのベビー・サーモンを数匹釣っただけだった。

「もう2～3週間たったら、違う種類の大きなサーモンが入江に上がってくる。それまで滞在したら。」とスミティはいうがもちろんそれは夢のまた夢。ベビー・サーモンを釣ったことさえわたしたちにとってはよい土産話である。

昼過ぎになり、潮の流れはピタリと止まってしまった。夕方になるまでマスは期待できないが好釣場を目の前にしてこのまま引き下がるのも悔しい。スミティはマスにしか興味がない

が、わたしたちは岸から投げ釣りに挑戦する。

何が釣れるか分からないが、投げ釣り用の竿に12号の力糸、先にキス釣り用の海草天秤を付け、バス釣り用のフックを使うというめちゃくちゃな仕掛である。餌も何を使ったら良いか分からない。幸い岸边には貝が無数にいたので、殻を割り、中身を取り出して餌にした。

思いきって70～80メートル投げて、ゆっくりとリールを巻くと、のっけからググッと良い当たり。夢中でリールを巻くと、残念ながら大きなコンブ。川底には海草が豊富らしくすぐに根がかりしてしまう。せっかく持っていた海草天秤も2つたちまち根がかりしてしまった。代わりに納屋に転がっていた古いボルトを重りにして再度挑戦。

20分ほどすると今度はグウッと本当に強い引きがある。期待に胸を膨らませながらリールを巻くと、思いがけず20センチ程のpearl（スズキ）をヒット。まさかスズキが釣れるとは思ってもみなかった……。

初ヒットに力を得て手製の仕掛でスズキ釣りに挑戦すると、もう1匹同じくらいのスズキをヒット。

早速、息子と娘にそこら中の貝を集めさせて殻を割り、投げ釣りに挑戦するが、投げるたびに根がかりでスムーズにリールを巻くことができない。竿を右に引き、左に引き、根がかりをはずそうとしてもうまくいかず、つぎつぎとフックを失くしてしまう。こうして断腸の思いでスズキ釣りを断念。仕掛さえよければ貝の生き餌でスズキが爆釣できたかもしれないのに本当に悔いの残る思いだった。

### ——息子の贈り物——

朝起きがけに雑魚を釣り、朝食後はボートでマス釣り。昼食後は投げ釣りをしたり雑魚を釣り、夕方またボートでマスとサーモン釣りの釣り三昧。

ときには夕食の後も夜釣りを楽しむ。夜釣りをしていると、対岸の家のアーケ灯がブルーサファイアにキラキラと光るのが見える。ただでも静かな入江はシーンとして物音もしない。騒々しい都会生活を余儀なくされているわたしにとっては、静寂がなによりのご馳走である。皓皓たる満月が天空に輝き、星もかすんでしまうほどの明るさである。9時近くになって夕日もやっと山並に沈み切り、夜の帳が降りる。

こうして放心の5日間をわたしたちはオリンピア半島で過ごした。わたしには電話もなく、ファックスもなく、読むべき書類もない。夢も見ないほど熟睡したのは久方ぶりである。息子も日能研を忘れ、受験勉強から解放され生気はつらつとしている。反抗期の娘も家事から解放された妻も穏やかな気持ちが顔に現れている。

釣った魚はブルヘッドが数十匹、マスが10数匹、スズキが2匹、ベビー・サーモンが数匹と釣果は今一つだった。だがわたしたち家族は自然を心から堪能し、本当に久方ぶりに友人夫

婦との暖かい触れ合いを持つことができた。

それもこれも「釣りキチ・ヨシ坊」のおかげである。子供のころ故郷の旭川や雄物川でなまずやボラを釣って以来、釣りは忘れてしまった。再び釣りの愉しみを思い出させてくれた、いや教えてくれた息子に感謝しなければなるまい。釣りは息子からのわたしへの最高の贈り物である。

帰国してすぐわたしはスミティに礼状を送った。ほどなく、スミティとベティから返事があった。

We so enjoyed your visit, it was more like a family vacation rather than time spent with visitors. I told Betty I had not seen Masa so relaxed and happy since we have known you and that is what we were hoping the holiday would be like for you.

（今回のみんなの訪問は、お客さんというより家族うちのバケーションみたいなものだった。ベティにもいったんだが、今までマサ（注：わたしのこと）があんなにリラックスして幸せそうな様子を見たことがなかったし、それこそ本当に理想的な休日というもんだ）